

エコロジーとエコノミー

藤 目 節 夫

エコノミーが20世紀の重要なキーワードとすれば、エコロジーは間違いなく21世紀の重要なキーワードの一つとなるのであろうことは想像に難くない。生物と環境との関係、あるいはその関係を研究する学問をエコロジーというのは多くの人の知るところであるが、この概念が広く流布するようになったのはごく最近のことである。エコロジーは本来エコノミーと対峙するものではないと思うのだが、我が国におけるエコロジーという概念は明らかにエコノミーに対立するものとして、換言すれば「開発と保全」という対立図式の中で生まれてきたことは間違いない。エコノミーはイコール、経済発展のための地域開発そして環境破壊につながるものとして、一方エコロジーは環境を破壊から守り、保全するものとして認識するという図式である。この捉え方は明らかに二律背反的であるが、はたしてエコノミーとエコロジーは両立しないものなのであろうか。近年、「持続可能な発展」という言葉が使われるようになったが、これはまさにこの両立を意図したものであることを考えると、両立は決して簡単なことではないが、さりとて全く不可能ということでもなさろうと思うのである。

のつけから固くて抽象的な議論となって恐縮であるが、エコノミーとエコロジーの両立ということを考えるようになったのは、実は宇和海における大量のアコヤ貝の斃死とそれに対する地元の対応について、少しばかり疑問をもったからである。ご承知のように、真珠養殖は南予の重要な基幹産業であるが、それがアコヤ貝の斃死率の急増で重大なピンチを迎えている。真珠養殖業にとり未曾有の危機であるから、地元では真剣にその対策を講じようとしていると思いたいが、どうも私にはそのベクトルの方向が違うのではないかと思われてならない。斯くいうと地元関係者のお叱りを受けることは重々承知しているが、しかしそれでも間違っていると思うのだから致し方ない。

この未曾有の危機に対する地元の対応はというと、その原因をフグ養殖に使用されるホルマリンに求め、その使用禁止運動を展開したことであるが、これがまず分からない。私は科学者ではあるが化学者ではないので、ホルマリンが斃死の原因か否かは承知しない。多くの化学者が調査をしてなおかつ原因を特定できないのだから、化学が素人の人間に分かるはずがない。ここで小生が不思議に思うのは、ホルマリンを原因と考えるのなら、漁業者が汚した海の汚染も同程度に原因と考えても良さそうなものなのに、現実にはそのような指摘がほとんどなされなかったことである。「ホルマリン原因説」のみが声高に喧伝されたが、外部から見るとそれは片手落ちではないか、より厳しい表現をすれば一種の責任転嫁ではないかとすら思える。少し考えてみれば、限られた海域に何億、何十億という貝を養殖し自然界には絶対存在しない異常な環境を作っているわけで、環境に対する負荷は大きく貝の生育にとり良からうはずがない。早晩、このような危機が来るであろうことは、常識のある人ならば容易に予想できることであるにも関わらず、海に対する環境負荷を軽減しようとする活動は一部の例外を除いて起こらなかった。それどころか、危機到来以前では正規の生産割当数の2～3倍の貝を養殖し、斃死率が増加すると、その分を見込んでさらに多くの貝の養殖を行ってきたという。

環境やエコロジーは現在のはやり言葉であるが、多くの人にとりそれは理念であって、将来的にはともかく現時点において自分の生活を脅かす存在ではない。しかし宇和海地域にとっては、環境やエコロジーは理念でもお題目でもなく、自分たちの経済に直結した現実の問題であるはずである。それにもかかわらず、海への環境負荷を軽減する実質的な活動はほとんどなされなかった。海への環境に悪い合成洗剤も使い放題、海への環境負荷が少ない合併浄化槽の普及も遅々として進まない。斯くいうと合併浄化槽は高いと反論する人がいるかもしれないが、かつて真珠景気で沸いた地域がその程度の金がないとは言わせない。好景気時に宇和島の飲み屋で散財した金やパチンコに消えた金があれば、合併浄化槽の設置などいとも簡単である。要は、環境の大切さについて真剣に考えず、それを守ろうという意志がなかっただけではないのか。これまでの漁民の対応を非難することが目的ではない、宇和海の豊かな自然とそれがもたらす経済的繁栄を子孫に残すには、いまが最後のチ

チャンスであり、早急に海洋環境を回復する活動に着手すべきであると指摘するのが小論の目的なのである。

いま全国で顔のない町が蔓延しており、町の顔づくりが一部の町では真剣に検討され実施されている。宇和海の町や村は「環境町づくり」をキーワードにこれからの町づくりを推進することを提言したい。松山市の姉妹都市のドイツのフライブルグ市は、「環境首都」の称号を与えられるほどの環境による町づくりを行い全世界から注目を集めている。環境に関する世界的機関や企業が立地し、それが同市の経済を大きく支えている。その素晴らしい環境政策をここでつまびらかにする紙面の余裕はないが、ミミズが干涸らびるという理由で道を舗装しないという事例だけでも、彼らの環境にかける意気込みが理解できるであろう。日本人は「自然との共生」を軽々しく口にしますが、それがいかに安っぽいものであるかをこの事例から思い知らされる。

さて、フライブルグの町づくりは当初は環境を守ろうという運動から展開されたが、この方式を日本にそのまま導入することは残念ながら容易ではない。同市の場合、環境運動が結果として経済に結びついたのだが、わが国では当初から環境が経済に結びつく展望がないと環境運動はあまり進展を見ないであろう。そうだとすれば、環境と経済を容易に結びつけられる宇和海地域は、ある意味では恵まれた地域であることになる。この恵まれた条件を生かして、全国から注目される環境町づくりを行うのがこの地域の21世紀の課題である。抽象的な問題提起だけではおもしろくない。大学教師の机上の空論の誹りは免れないが、それでも敢えて具体的ないくつかの提案を行ってみよう。

まず、環境の重要性に対する行政の強い意志表示が必要であり、そのためには各役場に海洋環境課を早急に設置する必要がある。そして、宇和海の自治体が協力して海洋環境研究所を設立し、科学的に海の環境維持に対処する必要もあろう。場合によっては、県の宇和島水産試験場と共同の組織とするのも一案である。環境は行政のみで守れるものではないので、住民への積極的な環境広報活動が必要である。ちなみに、フライブルグの場合には専門の広報員を数名配置している。もし大人が頭が固くて頼りにならないとすると、残された道は子供の教育であり、学校・役場・環境研究所が一体となった環境教育への取り組みが必要となる。子供の大人への影響力

は馬鹿にならない。埼玉県秩父市の宮の川商店街は、月に一度のナイトバザールを開催し、全国から注目されているが、彼らの意識を変革したのは各商店の子供が自分の親について書いた作文である。「うちのお父さんは昼日中から酒を飲み遊び回り気楽なものである」との指摘にショックを受け、これを契機に発憤した結果が活性化につながった。宇和海地域でも、小学校から環境教育を実施すれば、中高校生ぐらいになるとかなりしっかりした環境意識を持つであろう。そうなれば、環境を無視した親の行動に疑問を抱き時には非難もするであろう。たとえ他人の正当な意見には聞く耳を持たない大人も、相手が子供となるとそうはいかない。我が子ゆえに、おまけに正当な意見ゆえに聞かざるを得ない。斯様に考えると、教育は一般にその効果が出るのには時間がかかるが、親がどうしようもない場合にはこちらの方が手っ取り早いということになる。

宇和海の環境問題に言及して紙面は尽きたが、小論で訴えたいことは、その問題の根底に潜むエコノミーとエコロジーの関係である。エコロジーに配慮することが、ひいてはエコノミーにもよい結果をもたらす時代が到来しつつあるという認識を多くの人に持ってほしい、というのが小生のささやかな願いである。これは何も自然一杯の地域のみにも通用することではなく、都市においても同様に指摘できることである。たとえば、わが国の戦後の都市づくりは「車の都合に合わせた町づくり」であり、その結果都市は車で渋滞し、都心の「ハレの場」は多くの都市で消滅してしまった。もし、ヨーロッパの都市のように都心への車の流入を禁止すれば、排ガスで汚された環境はなくなるであろうし、都心は買い物や遊び、あるいは賑わいや出会いを求める人々で溢れ、再びハレの場として復活し都市経済にも好影響を及ぼすであろう。世間は不景気と大騒ぎであるが、このような時にこそ好景気に浮かれていたときには考えなかったことを少し静かに考えてみるというのが人間の知恵ではないのか。依然として生産活動によるエコノミーの発展と豊かさのみを追い求めるのではなく、エコロジーによる豊かさというものにも少し目を向けてもよいのではないか。エコロジーによる豊かさを追及できるところに地方の良さの一つがあるのではないかと思っている。

(愛媛大学法文学部教授)